

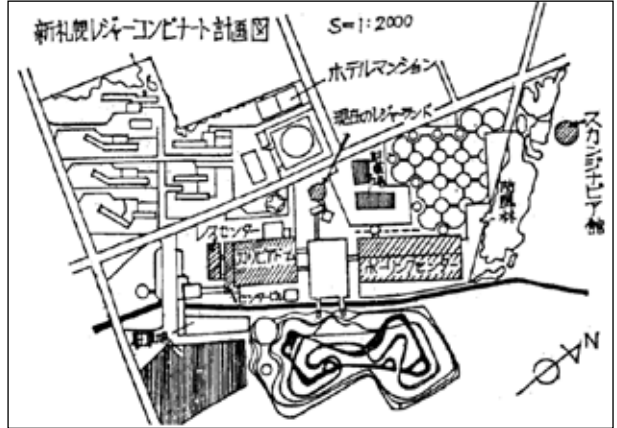
ないがいれじゃーこんびなーとこうそう

内外レジャーコンビナート構想

幻の花川南地区の夢プラン

現在の石狩市の人口が急増するきっかけとなった新札幌団地（現在の花川南地区の住宅団地）開発を進めた内外緑地株式会社（後にユーアンドアイ・マツザカと改称）が、団地内の90万m²の敷地に計画した、レジャー施設を付帯する壮大な未来都市構想が「内外レジャーコンビナート構想」です。

内外緑地は昭和41（1966）年に温泉を掘り当て、温泉施設の計画をしますが、同社社長、松坂有祐は昭和43（1968）年、新聞紙上で「造波マシンの温水プール、人造湖、熊や鹿の野生の国、レストハウス」などの遊園施設構想も発表します。翌、昭和44



「ニュー・サッポロ・シティ」
(ユーアンド・アイ・マツザカ)

（1969）年1月には温泉施設が完成し、「内外レジャーランド」という名称で現在の花川病院付近に開業しました。さらに、松坂の構想は膨らみ、同年12月の北海タイムス記事では「大規模なレジャーランドを作る。万博の施設を持ってきて、北欧的なスタイルを取り入れたい」と語っています。

また、昭和46（1971）年1月の記事では「内外レジャーコンビナート」という呼称のもと、「スカンジナビア館のほか、常夏のカリビアンドーム（温水プール、波乗り、海賊船、カリブ舞踊）、道内一のボウリング場、シミュレーター方式のゴルフ場、巨大レストランビル、6階建て本社ビル、有線テレビ放送センター、リゾートホテル、別荘ビル、音楽ホール、アトリエ棟、展示ホール」など破格のプランを示します。

そして、スカンジナビア館がオープンした昭和47（1972）年2月2日の北海道新聞では、まるまる4頁をPR広告で埋め、レジャーエリア構想の最終形としての「ニューサッポロシティパイロットプラン」を掲載。その内容はインターチェンジ、電鉄駅、ミニモノレール、マンション、高級ホテル、温水プールやレストランやステージを備えた巨大ドーム、映画や演劇や音楽の劇場、24時間営業の銀行や郵便局、北欧風の森、野外音楽堂、スポーツパーク、貸別荘群など、夢のような世界でした。

しかし、同年7月に「ボウルニューサッポロ」が52レーンで完成したのを最後に、壮大な計画は頓挫。オイルショックのおありを受け、昭和51年11月に会社は事実上倒産してしまいます。数々の構想の中で実際に完成した、内外レジャーランド、スカンジナビア館、ボウルニューサッポロの建物も、今は跡形もありません。

(安田秀司)

- (1) 1968年12月24日北海タイムス記事。
- (2) 1969年12月11日北海タイムス記事。
- (3) 1971年1月4日北海タイムス記事および図。
- (4) 1972年2月2日北海道新聞 広告記事。